

中央アフリカ・マラウイに見られる生活空間の性差 - チェンベ村の事例から -

山口ゼミ 4年 新井ルミ子

[要旨]

チェンベ村は、アフリカの中央部に位置するマラウイという国の南部にある。マラウイの国土の5分の1を占めるのが、アフリカで3番目に大きいマラウイ湖（タンザニア・モザンビークではニヤサ湖と呼ばれている）という淡水湖である。チェンベ村もマラウイ湖に面しており、マラウイ湖国立公園が隣接する。村人の生活はいまだに湖や周辺の山に依存しているように見えるが、マラウイの中でも観光客が多く訪れる場所であり、チェンベ村は外部との接触が多い地域であると言える。そのため、歴史的に遡ってみると、現在の生活に至るまでに様々な影響を受け、その都度変化を経てきたことは明白である。

2004年8月15日から9月11日まで、京都精華大学環境社会学部教授の嘉田由紀子先生のご好意で、同大学の授業の一環としての海外調査演習に同行させていただくことができ、現地に滞在し、村人の生活を観察した。村人達の生活の中で一番不思議に感じたことは、男性と女性とが一緒に過ごしている場面にほとんど出会わなかったことである。私自身が撮影した696枚の写真と同行した先生と生徒からいただいた388枚の写真を見ても男女と一緒に写っている写真は10枚程度であった。このような写真の分析と現地で見聞きした情報などを基に、村における生活空間の性差というパターンを抽出した。

本論では、生活空間の性差を解釈する上で参照枠となる内容を社会人類学の既存研究の中から取り上げた。そこでは、アフリカにおいて生活に影響を与える要素として、生業・労働、家族・親族、居住、宗教、アフリカの女性、という側面に分けた。また、村の生活自体を理解するためにも、歴史的考察が必要なため、歴史人類学的視点やアフリカにおける歴史の影響についても考察した。

そして、社会人類学的視点・歴史人類学的視点の両方からチェンベ村における生活空間の性差について再考察した。結論としては、性による役割分担・母系社会・妻方居住・思春期頃からの男子の別居・アフリカの女性観などが絡み合った結果、村で生活空間の性差が見られるようになったのではないかという解釈に至った。また、それだけでは説明出来ない現象は歴史的变化を考察することで理解することが出来た。生活空間の性差にも変化の可能性があることもわかった。

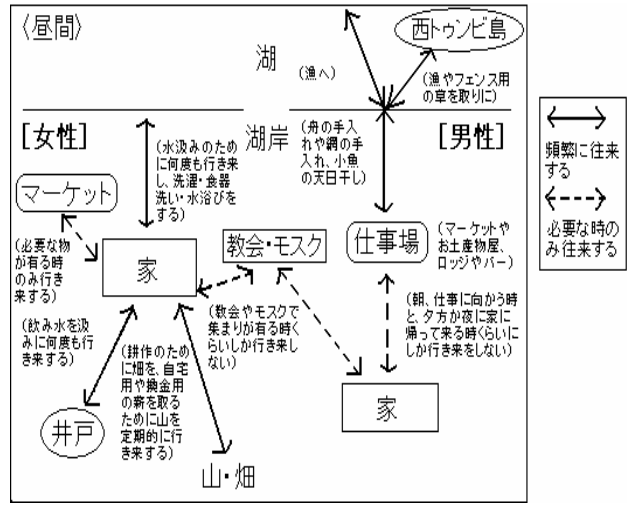
[卒論目次]

第1章 卒論の目的	第4章 解釈のための社会人類学的視点
第2章 概観	第1節 生業・労働
第1節 マラウイについて	第2節 家族・親族
第2節 マラウイ湖について	第3節 居住
第3節 チェンベ村について	第4節 宗教
第3章 チェンベ村に見られる生活空間の性差	第5節 アフリカの女性
第1節 女性の生活空間	第6節 解釈における問題点
第2節 男性の生活空間	第5章 マラウイ・チェンベ村再考
第3節 子どもの生活空間	第1節 歴史人類学的視点
第4節 男女が共有している生活空間	第2節 生活空間の性差の解釈
第5節 生活空間の性差	第6章 結論

表1 村人の活動空間

場所	そこで見られる村の人々	人々がそこでやっている事	写真の枚数
ロッジ	男性のみ	ロッジ経営、労働	男-2
土産物屋	男性のみ	土産物売り、ツアーガイドとしての働き口探し	男-2
木彫場	男性のみ	木彫(土産物生産)	男-1
酒場	男性のみ(店主である女性は除く)	お酒を飲む	男-2, 女-1
西トゥンビ島	男性のみ	漁、糞採り、薪拾い(換金用)	
マラウイ湖	男性のみ	漁	男-6
マラウイ湖湖畔	男性、女性、子どもたち	男性・舟の手入れ、網の手入れ、魚の干し 女性・食器洗い、洗濯、水汲み 子どもたち・小魚漁、両親の手伝い、水遊び	男-23, 女-37, 子-43
マーケット	男性、女性、(比較的男性が多い)	売り子、買い物	男-7, 女-1
学校	子どものみ(先生は除く)	勉強	男-3, 女-3, 子-15
教会	男性、女性、子どもたち(比較的男性が多い)	ミサ、お祈り	男-2, 女-2, 子-2
道	男性、女性、子どもたち(比較的男性が多い)	休憩、子どもと遊ぶ、商売、世間話	男-4, 女-21, 子-26
家(建物自体)	男性、女性、子どもたち	寝る、食事をする(男性と女性は基本的に別々に食事をする)	男-2, 女-24, 子-7
家の庭	男性、女性、子どもたち(男性は稀である)	休憩、子どもの世話、世間話、食事をする、料理	男-2, 女-9, 子-20
ンゴンデ(軒先)	女性、子どもたち	休憩、子どもの世話、世間話、食事をする	女-10, 子-8
井戸	女性、子どもたち	水汲み、世間話	女-10, 子-8
畑	女性のみ	農耕(基本的にはトゥモロコシ栽培)	女-7, 子-6
山	女性、女の子	薪拾い(基本的には自宅用)	女-6, 子-3

写真の総数 1,084枚



主要参考文献

- 阿部年晴著 1982 『アフリカ人の生活と伝統』三省堂
- A・M・ルギラ著 嶋田義仁訳 2004 『アフリカの宗教 シリーズ 世界の宗教』青土社
- 綾部恒雄監修 2000 「チェワ族」「マラウイ」『世界民族事典』p.392,p.399~941 弘文堂
- David Livingstone, 1894 *A Popular account of Dr. Livingstone's Expedition to the Zambesi and its tributaries: and of the Discovery of Lakes Shirwa and Nyassa 1858-1864*, John Murray, London
- G・P・マードック著 内藤莞爾訳 2001 『社会構造：核家族の社会人類学』新泉社
- Gudrun Haraldsdottir, 2002 *Cooperation and Conflicting Interests: An Ethnography of Fishing and Fish trading on the shores of Lake Malawi*, Thesis submitted in partial fulfillment of the requirements for the Doctor of Philosophy degree in Anthropology in the Graduate College of The University of Iowa
- Joanne I.O.Abbot, 1996 *Rural Subsistence and Protected Areas: Community Use of the miombo woodlands of Lake Malawi National Park*, Thesis for Doctor of Philosophy, University College of London
- Jalale, Tressa A.R. 1993 *National Parks Tourism in Malawi*, Thesis submitted for the degree of Master in Philosophy (in conservation biology). University of Kent
- アイリス・バーガー、E・フランシス・ホワイト著 富永智津子訳 2004 『アフリカ史再考 - 女性・ジェンダーの視点から』未来社
- 嘉田由紀子著 1983 「アフリカの女性 その地位と役割の乖離」米山俊直、伊谷純一郎編『アフリカハンドブック』p.392-407 講談社
- 木村和男著 2000 『イギリス帝国連邦運動と自治植民地』創文社
- 栗田和明著 2004 『マラウイを知るための45章』明石書店
- 小馬徹著 1999 「家族・親族組織」伊谷純一郎 他監修『新訂増補]アフリカを知る事典』p.81-84 平凡社
- 牧本直喜著 1999 「アフリカ、マラウイ湖国立公園と周辺住民とのかかわり - 自然保護と住民生活との葛藤 - 」『環境技術』vol.28,no.3,p.58-67
- 松田素二著 1997 「植民地文化における主体性と暴力 - 西ケニア、マラゴリ社会の経験から」山下晋司、山本真鳥編『植民地主義と文化 人類学のパースペクティブ』p.276-306 新曜社
- 宮本正興、松田素二編 2000 『新書アフリカ史』講談社
- 中根千枝著 1970 『家族の構造』東京大学出版会
- 嶋田義仁著 1992 「アフリカの宗教」日野舜也編『アフリカの文化と社会』p.113-158 勁草書房
- Smith, L. 1993 *A historical Perspective on the fishery of Chembe Enclave Village in Lake Malawi National Park*, Nyala, 17(2) p.49-60
- 須藤健一著 1989 『母系社会の構造：サンゴ礁の島々の民族誌』紀伊國屋書店
- 須藤健一、山下晋司、吉岡政徳編 1988 『歴史のなかの社会』弘文堂
- 吉岡政徳著 2000 「歴史とかがわる人類学」『国立民族学博物館研究報告』21 p.3-34
- 和田正平編 1996 『アフリカ女性の民族誌 伝統と近代化のはざままで』明石書店 他68点